

設置学校の事業報告

高知学園短期大学

1 事業の概要

「世界の鐘」の呼びかける平和と友愛の精神を柱とし、自由と規律を尊び、真理を深め、創造性と情操を培い、広い教養と健全な社会性を身につけた短期大学士の学位を有する専門的職業人を育成するという本学の基本方針のもと、本年度は、16 項目の重点目標を定め、その達成のため取り組んだ。その主なものは、

- (1) 入学者の確保に向けた効果的な募集活動
- (2) 生涯学び続け、主体的に考える力を持ち未来を切り開く人材の育成
- (3) 専門的職業人育成のためのキャリア教育の充実
- (4) 入口から出口に至る教育の充実（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの徹底、PDCAサイクルの確立）
- (5) 各学科の目指す資格等の確実な取得と全国的にも質の高い短期大学を目指す
- (6) 教職員の資質指導力の向上及び、教職員の協働体制の確立
- (7) 地域社会に貢献する人材づくり
- (8) 入学者のオリエンテーションの充実
- (9) FD・SD の活性化
- (10) 外部資金の獲得
- (11) 高知学園大学の設置認可及び大学・短大併置の体制充実
- (12) 地域に貢献する大学として諸施策の提案
- (13) 新設大学 8 号館の建築及び既設校舎の改修等施設の充実
- (14) 震災対策等危機管理体制の充実
- (15) 第三者評価（短期大学基準協会）の受任体制の充実
- (16) 県内の高等教育機関の連携強化

2 事業の実績

- (1) 入学者の確保に向けた取組みでは、学生支援課と入学試験募集委員会との有機的な連携のもと教職員の協働体制により事業を展開した。年間行事計画により、積極的な広報活動を行っている。年間 4 回開催のオープンキャンパスでは年度毎にテーマを掲げ、それに沿って各学科・専攻で企画検討し内容の充実を図る工夫、時期を見極めた効果的な学校訪問、教職員が担当する高校での講演活動や説明会、高校の行事への積極的な参加等を通じて本学の理解啓発に努めた。

入学者は、短期大学本科（幼児保育学科・歯科衛生学科・看護学科）の入学定員 180 名に対し 186 名の入学者、専攻科（応用生命科学専攻・地域看護学専攻）の入学定員 30 名に対し 33 名となり、短期大学全体で定員を 9 名上回る事となった。

- (2) 各学科、各教科の授業にアクティブラーニングを積極的に取り入れ、学生が主体的に考える力の醸成に努めている。
- (3) 本学学生のキャリア形成は、必要不可欠であることから、平成 28 年度から全学科でキャリア教育に取り組んでいる。本学で作製したキャリアノートの活用、キャリア形成セミナーの開

催や就活講座、学生のマナー指導等に積極的に取組み充実を図っている。キャリア形成の授業では、「ニュース検定」の受検をさせるなど、社会的視野を広げるための工夫も行っている。また、各学科が中心となって、卒業生を講師に招いての「ようこそ先輩」を開催・拡充を図り学生の将来の生き方や職に対する意識を高めるなどの取組みも学生のキャリア形成に効果的であった。

- (4) 大学教育の入口から出口に至る教育の充実を図るため、本学の方針としてディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）を学内及び学外に明示し、その方針に沿った教育の実践に努めた。その結果を検証するためのPDCAサイクルの取組みを開始している。
- (5) 各学科における資格取得のうち国家試験については授業の充実と補充指導を行い各学科（医療衛生学科医療検査専攻及び歯科衛生専攻、看護学科、専攻科地域看護学専攻）とも100%を目指し取り組んだ。結果は100%達成は、1 国家試験のみ(保健師)となり、目標達成のためには、更なる努力と対策が必要となった。（別表参照）
- (6) 教職員の指導力向上については、教職員間で行う授業参観や、FD・SD活動、学生の授業評価などに基づいて指導力の向上に努めている。また、学内の委員会組織等を通じて教職員の協働体制の確立に努めている。
- (7) 高知県の三大学、学園短大、高知高専の高等教育機関と産業界で構成する産学官民連携センターの活動に積極的に参画するとともに地域貢献に関する事業の取組みを進めてきた。これまで幼稚園・小学校・中学校・高等学校で実施してきた健康教育も継続拡充している。また昨年引き続き近隣の高齢者を対象として、健康に対する意識の醸成や地域の方々の本学に対する理解を得ることを目的として各学科・専攻の特色を生かした「いきいき健康フェア」を開催して好評を博した。今後更なる地域貢献が期待されている。
- (8) 入学者に対して高等学校と大学との段差を解消するため、オリエンテーションで大学生活の心構え、学業に臨む姿勢や態度等について丁寧に説明し、円滑に大学生活に入れるよう指導を行った。
- (9) 「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」の活用による教職員の資質・指導力の向上に関しては、学内の研究授業の実施、授業評価のためのアンケート調査や教職員合同での研修会の受講などを行った。また、本年度もFD・SD活動研究発表会を実施するとともに、年間の活動をまとめた「高知学園短期大学FD・SD活動報告書」を作成するなど、より積極的な取組みが実施できている。
- (10) 各学科教員が、外部資金獲得に向けての研究活動に意欲的に取組み、外部資金の獲得に向けて努力している。
- (11) 平成30年10月に高知学園大学設置申請書を提出し、大学設置審議会及び学校法人審査会の審査を受け、令和元年11月11日に文部科学大臣より設置が認可され、本年4月1日に開学の運びとなった。また同時に、高知学園短期大学として3学科（幼児保育学科・歯科衛生学科・看護学科）1専攻科（地域看護学専攻）の併置体制となった。
- (12) 地域に貢献する大学として教職員が、高知県・高知市の諸施策を検討する委員会の委員に就任するなど積極的に地域貢献を意識した取組みを進めている。
- (13) 大学の新校舎となる8号館は、学生の精神的な安定に好影響を及ぼすとされる木造3階建

てを採用した。主要構造にCLTを用いて、国内最大寸法12メートルの壁柱を採用した三層階通し構造という、大学の校舎としては日本初の極めて珍しい工法の建築物となっている。この校舎は、令和元年度サステナブル建築物等先導事業としての認可を受けた。また大学設置のために、新たにゼミ室・研究室の増設や、調理実習室の改修などを行い、科学技術の進歩に対応できる設備の充実を図りより高度な専門的職業人の育成のために必要な学習環境を整えた。

(14) 震災対策等は、災害対策委員会を中心に学生・教職員の防災意識の強化を図るための防災講演会、防災訓練を実施してきた。本年度より各学年・各学科の学生による「災害対策委員」を募り、学内の防災設備の点検や、震災訓練の実施の運営スタッフとしての活動も開始した。防災機器備品等の整備も計画的に行い、学生・教職員が必携としている防災マニュアルについても毎年更新し充実を図っている。

(15) 一般財団法人大学・短期大学基準協会（令和元年4月1日名称変更）認証評価については規定の7年ごとに審査を受けてきた。今回が、3回目となる認証評価結果は、基準Ⅰ建学の精神と教育の効果基準Ⅱ教育課程と学生支援基準Ⅲ教育資源と財的資源基準Ⅳリーダーシップとガバナンスの4基準すべて合（適格）認定された。

(16) 県内高等教育機関の学長・校長で「高知学長会議」を組織している。本年度は、本学が事務局当番校を勤め、本学において2回開催し高等教育機関としての教育や地域に貢献する人材づくり、各校の所有する施設設備の共同利用、災害時の連携などの意見交換会を行った。今後も更に連携し充実した教育環境の確保に努める。

3 募集活動

(1) 入学者選考

9月の特別推薦選考から3月の試験選考Bまでの6種類の選考と社会人選考3回、専攻科2回の選考および特別選考A・Bを実施した。

(2) オープンキャンパス

令和元年度は6月から9月にかけて4回実施した。オープンキャンパスが受験者増に直接繋がることから、積極的に広報活動を展開するとともに保護者を対象にした保護者のための講座を設ける等、内容の充実にも更なる努力を行い参加者の増加に努めた。参加生徒960名(79名減)、参加保護者414名(46名増)、全体では1,374名(33名減)の参加を得た。

(3) 高校訪問等

本学の学生募集入試委員会の教員と本学の学生支援課担当職員の協働体制により効果的な高校訪問、高校主催の説明会、高校の学校行事や講演等積極的に参加し、高校と本学の信頼関係を構築しながら募集活動を展開した。また本学主催の高校教員を対象とした入試説明会を本学で実施し、多くの教員の参加を得た。本年度も県外で実施する進学説明会に参加し、更に高校へも積極的に訪問を行った。

(4) 高校の進路指導に関する授業等

各高校の主催する進路指導講座やキャリア形成講演会に参加し、直接高校生に授業を行う模擬授業の機会の増加やPTA活動の一環として保護者を対象に行われる説明会にも講師として招聘される頻度も増加し、生徒・保護者両面の対策を実施した。

(5) 高知高校との連携

フェローシップによる対策を実施するために高校との連携を密にし、高知高校の2年生は

授業見学とオープンキャンパスへの参加、3年生は授業参加及びオープンキャンパスの参加等を行い、本学に対する理解を深めるとともに進学意欲を高めることに努めた。

(6) 広報計画実績

本県に対する卒業生の貢献度や就職率の高さを強調し高校生の目線でのアピールを目的として「私は、私のミライに種を蒔く。」のキャッチコピーを加えて本学の特色を強調してきた。県内では新聞、テレビ、ラジオ等の広報活動を行った。また、県外に向けての広報活動を積極的に実施し、予算内でより効果的に展開できた。

(7) 募集実績

令和2年度募集実績（高知学園大学）

学部・学科	出願者	合格者	入学者
健康科学部 管理栄養学科	77	73	54
健康科学部 臨床検査学科	78	69	59
合計	155	142	113

令和2年度募集実績（高知学園短期大学）

学科・専攻	出願者	合格者	入学者
幼児保育学科	92	86	80
歯科衛生学科	39	39	39
看護学科	120	80	67
専攻科応用生命科学専攻	18	13	13
専攻科地域看護学専攻	26	20	20
合計	295	238	219

4 進路指導実績

(1) 就職指導

各学科の就職委員と学生支援課、キャリアセンターの緊密な連携による学生指導やキャリア形成セミナー等の講演活動による意識の向上、就職資料の充実、IT 関連の整備等を通じて、学生たちの職業意識の高揚を図り、学生が積極的に就職活動に取り組む姿勢が向上した。

また、求人開拓も行うなど就職希望者全員の就職に向けての努力を重ねた。その結果、11年連続しての100%の就職率となった。

(2) 進学指導

本学の専攻科への進学者31名、他大学への進学者は3名。

(3) 令和元年度卒業生の進路状況

学科・卒業生数	職種	業種	就職者数	備考			
生活科学学科	栄養士	病院等	9	進学 : 2 その他 : 1 家庭 : 1			
		学校給食等	2				
		集団給食等	27				
	教員	栄養教諭	4				
		事務職員等	一般企業等		2		
	医療事務		6				
	上記以外		7				
卒業生数	61	就職希望者数	57	就職決定者数	57	就職率	100%

幼児保育学科	保育士	保育園等	56	進学 : 0 その他 : 2 家庭 : 1			
	教員	幼稚園	14				
	事務職員等	一般企業等	4				
	上記以外		1				
卒業生数	78	就職希望者数	75	就職決定者数	75	就職率	100%
医療衛生学科 医療検査専攻	臨床検査技師	病院等	6	進学 : 14 その他 : 2 家庭 : 8			
		検査センター	2				
	上記以外	4					
卒業生数	36	就職希望者数	12	就職決定者数	12	就職率	100%
医療衛生学科 歯科衛生専攻	歯科衛生士	歯科医院	24	進学 : 0 その他 : 0 家庭 : 2			
		病院	0				
	上記以外	2					
卒業生数	28	就職希望者数	26	就職決定者数	26	就職率	100%
看護学科	看護師	病院	46	進学 : 18 その他 : 0 家庭 : 4			
	教員	学校等	0				
	上記以外	0					
卒業生数	68	就職希望者数	46	就職決定者数	46	就職率	100%
合計 卒業生数	271	就職希望者数	216	就職決定者数	216	就職率	100%
専攻科 応用生命科学専攻	臨床検査技師	病院等	9	進学 : 0 家庭 : 1			
		検査センター	2				
修了者数	12	就職希望者数	11	就職決定者数	11	就職率	100%
専攻科 地域看護学専攻	看護師	病院	12	進学 : 0 その他 : 0 家庭 : 2			
		施設等	0				
	保健師	2					
	教員	学校	3				
修了者数	19	就職希望者	17	就職決定者	17	就職率	100%
総計				進学 : 34 その他 : 5 家庭 : 19			
卒業(修了)者 合計数	302	就職希望者数	244	就職決定者数	244	就職率	100%

*備考のその他とは、専門学校・各種学校・職業訓練入学。科目等履修生・卒後研修生。

5 人事計画実績

- (1) 令和元年度の専任教員は、58名となった。
兼任教員は、124名となった。
- (2) 専任職員は、17名となった。

6 教育研究実績

(1) 生活科学学科

1) 教育実績

- ① 食・栄養・健康に関わる理論と技術を多様な講義や実習、演習を通じて、実践力を備えた栄養士を養成するために、各教員は自己研鑽に努め、講義・実習・実験等の工夫により学生の専門知識・技術の修得に努めた。
- ② 調理学実習では、実技試験を実施するが、その内容については合格者登校日に課題として説明をおこない、入学前から個々の調理技術向上を図った。また、授業以外で

も別途補講によりスキルアップに努めた。臨床栄養学実習では、給食管理実習室を活用して病院食における治療食の大量調理を体験する授業とし、実践力を身に付けるために病院食の献立作成における技術の習得を強化した。

- ③ 学外実習にむけての実践力、応用力を身に付ける目的で、7月6日に「栄養士・管理栄養士倫理綱領」朗読と旭光徽章の授与による「飛翔式」を執り行い、61名の学生が実習に臨む姿勢と意識を高めた。
- ④ キャリア形成、就職活動の一環として、生活科学学科2年生を対象に第3回就職合同説明会を開催した(5月20日)。参加企業は12社(委託9、直営3)で22名の参加があり、栄養士採用のニーズが高いことがわかり、学生は直接企業から業務内容等を聞くことでより良い就職活動の場となった。
- ⑤ 栄養士実力認定試験(主催:一般社団法人全国栄養士養成施設協会)を2年生61名が受験した(令和元年12月8日)。全員が認定証Aを取得するべく、10月より各教科の補講や模擬試験を行った。模擬試験で基準点に達していない学生には更に補講を実施し、知識習得を行った。その結果、昨年度よりも認定証A取得学生割合が増加し、短期大学における全国平均点を上回る結果が得られた。また認定証Cを取得した1名の学生に対しても、更なる補講と本試験の再試験を実施することにより、栄養士としての知識習得・定着を行った。
- ⑥ 高知県公立学校教員採用候補者選考審査(栄養教諭)を受験する学生への受験対策として、6月の試験までに2月から集中講義として、栄養教諭採用審査対策講座を実施した。合格には至らなかったが、学生のやる気や学ぶ意欲の向上につながり、4名が臨時教員として着任することとなった。
- ⑦ 在学生および卒業生を対象に国家試験準備講座を開催し、それぞれの専門科目担当の教員により管理栄養士受験対策を行った。
- ⑧ イキイキ健康フェア(11月30日)に、生活科学学科では、高齢期の健康についてフードモデルを使って昼食を再現してもらい、食育SATによる栄養相談を実施した。また、土佐茶とお菓子の提供も併せて実施した。学生5名、教員8名が参加した。
- ⑨ 2年生が主体となって1年生を歓迎するHLS Welcome Partyを開催した(4月23日)。授業や大学生活について1年生が2年生に相談でき、2年生からはアドバイスがしやすいなど学生間のきっかけづくりの場として効果的であった。
- ⑩ 高知県産業振興センター主催の第8回ものづくり総合技術展が11月7日～9日に高知ちばさんセンターで開催され、本学科から学生が主体となって教員と「ものづくり教室」に参加した。未就学児から小学校低学年を対象に、箸置き・バランスランチョンマット作りの体験コーナーを企画し実施した。子供から成人まで120名以上の参加者があり、ものづくりを通して「食」を考える体験の場となり、学生も栄養の専門職として認識を高める良い機会となった。
- ⑪ 平成30年度に引き続き、行政と民間企業の有志による「土佐茶プロジェクト」に本学科の学生が土佐茶ガールズとして参加し、土佐の豊穰祭や新茶まつりなどで土佐茶の普及活動を行った。
- ⑫ 公益社団法人日本栄養士会が「栄養の日・栄養週間2019」の事業の一環として、管理栄養士・栄養士の職能認知・普及を目的に「栄養ワンダー2019」を7月1日～8

月 31 日まで行っている。本学科では、給食実務論実習における大量調理販売実習の期間（7 月 12 日、17 日）の 2 日間実施した。日本栄養士会からの協賛食材（キウイフルーツ、ヨーグルト）を用いて販売献立に取り入れ、学生考案デザートを提供及びリーフレット等の配布、パワーポイントを使用した 10 分程度の「栄養の日・栄養週間 2019」に関するプレゼンテーションを（各日 2 回）を学生・教職員（延べ 200 人）を対象に実施した。

2) 研究実績

令和元年度は、著書（3）、論文（1 編）、学会発表（11 編）、その他講演など（16 編）を行い、それぞれ教員の質の向上に努める研究活動を行った。

(2) 幼児保育学科

1) 教育実績

- ① 本学科が定めた教育課程編成・実施の方針に沿い、特に幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程のカリキュラム改正に伴う教育効果の向上と、質的向上に向けた授業改善に取り組んだことにより、一定の学習成果を収めることができた。
- ② 本学科が定めた学位授与の方針に基づき、卒業生全員が幼稚園教諭二種免許状と保育士資格を取得することに努めたが、令和元年度卒業生 78 名中 75 名は両方、1 名は幼稚園教諭免許状のみ、1 名は保育士資格のみ、2 名はいずれの資格も取得しないという結果となった。
- ③ 本学科が定めた入学者受け入れの方針に基づき、入学直後から学生の学習成果獲得が円滑に実現できるよう、入学生の学業に対する興味・関心及び動機づけを高める教育力・実践力の改善をそれぞれの教員が連携して行い、学生の適切な学習時間の確保と、共同体制による指導で一定のレベルを保つことができた。
- ④ 異学年学習交流会を通して、上級生と下級生との相互交流により親睦を深め、学習が促進された。全体会での上級生による実習先での実践発表や班別でのプレゼンテーションを通して、下級生は実習に臨む姿勢や心構えなどについて認識が深まった。併せて、上級生は、実習に対する自覚の高まりや実習へ取り組む姿勢などに成果が見られた。
- ⑤ 中・四国保育学生研究大会への関わりを具体化させるため、プロジェクトを立ち上げ、授業でどのような取り組みを進めていくか等について検討し、方向付けができた。
- ⑥ 教員免許状授与式の開催は、コロナウィルス感染拡大防止措置により実施できなかったため、教育職としての学生のより深い自覚と認識を高める機会を逃すことになった。

2) 研究実績

- ① それぞれの教員は、研究倫理の理解を深めるとともに、適切な研究倫理に基づいて著作・研究論文、学会発表、作品発表等を積極的に行い、各分野の専門性を高め、その成果を教育に還元しようと努めた。その結果、学会誌発表 1 件、研究紀要投稿 3 件、テキスト執筆 1 件、講演 3 件となった。紀要の 2 件については、学科教員の共同研究によるものである。また、共同研究で取り組んでいる「幼児保育学科における異学年相互交流学習会」及び「幼児保育学科における学科行事」の分析考察については、本学の FD・SD 活動においても発表した。

SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワークフォーラム 2019）においては、ポスター発表を1件行った。

- ② 養成課程から就職後の適応感を高める指導体制の確立についての研究を深めるため、共同研究で「幼児保育学科における学習成果と卒業後の取り組み状況との関係」の分析考察を行い、本学のFD・SD活動において発表した。
- ③ 生涯学習講座によるアンケートの分析など、共同研究としての論文や報告についての検討を行い、意識の高揚を図った。

(3) 医療衛生学科

(3-1) 医療検査専攻

1) 教育実績

- ① 学内教育において実践力をもった臨床検査技師を育成するために各教員が教材の開発と教育手法の工夫に努めた。また、臨床施設の協力のもと病院見学実習（1年次）、夏期体験実習（2年次）、臨地実習（3年次必修）を実施した。さらに、高知県臨床検査技師会主催の各種研修会への参加を推奨した。技師会と連携した学生支援活動（2年次）を3月に2回予定したが、新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかった。
- ② 臨床検査技師国家試験については、専攻長と3年担任を中心とする専攻内国家試験対策会議を定期的に行き、模擬試験の結果を見ながら、各教科教員による国家試験対策とチーム指導・個別指導・成績不振者対象補習授業を行うなどの努力をして100%の合格を目指して努力してきたが、令和元年度は、別表のとおり大変に厳しい結果となった。次年度に向けて検証をし、改善を図るとともに、不合格の学生に対する支援も行っていく。また、在学中に取得できる各種資格についても受験を勧め、その対策のための補習や模擬試験等を実施し、各種資格に向けての支援も行っている。
- ③ 臨床検査技師の専門化・高度化への対応として学生の進学を支援した結果、専攻科応用生命科学専攻に13名が進学し、大学編入者が1名（徳島大学医学部保健学科）であった。
- ④ 学生の就職活動推進のため、3年生対象に、病院、健康管理センター、検査関連企業等による就職セミナーを企画（8月）し、その後も就職斡旋に努め、希望者全員の就職が決定した。
- ⑤ 学生のモチベーションを高めるために、医療検査専攻の全学生が参加するキャリア形成事業を開催した。宣誓式（4月）、臨地実習報告会（9月）、を実施した。また応用生命科学専攻の前期修了研究発表会にも全学生が参加した。さらに、第52回中国四国医学検査学会（松江市）において開催された学生フォーラム（11月）に参加するなど学外行事にも活動を広げた。
- ⑥ 学習成果を高めるために、教員がFD活動に積極的に参加し、特に発表形式のアクティブラーニング、ルーブリック評価の導入、独自のテキスト作成などを授業に取り入れ改善に努めた。また、第3回高知学園短期大学FD・SD活動研究発表会（8月）で「実習レポートにおけるルーブリック評価の有用性」について本専攻の取組を発表した。
- ⑦ 学園祭における健康食品の適切な利用の啓蒙や骨髄移植推進事業、また本学主催のいきいき健康フェアでの対外的な健康増進活動、リレー・フォー・ライフ高知、歯っぴい

スマイルフェア、子宮頸がん予防・啓発キャンペーン、自治体病院の健康フェアなどの学外活動に参加し、健康・医療分野で学生と共に社会貢献した。

- ⑧ 6回目となる体験実習「臨床検査をのぞいてみよう！」を企画し（3月）、高校生46名の参加申込みがあったが、新型コロナウイルス感染症の影響で実施延期となった。

2) 研究実績

- ① 医療検査専攻教員の研究業績は、延べ著書2編、論文1編、研究紀要1編、学会発表3題、その他6件であった。
- ② 外部資金獲得については日本学術振興会科学研究費助成事業へ2名が応募したが、採択には至らなかった。1名は、前年度採択の科学研究費（若手研究）を継続中である。

(3-2) 歯科衛生専攻

1) 教育実績

- ① 1年生の段階から主体的な学びとなるよう1年生から3年生の縦割りのグループを作り、「健康教育」の授業である歯みがき指導実習に参加した。また、この授業を通して、幼児・児童・生徒等への年齢層にあった対応等、学習効果がみられた。指導施設数および対象人数は幼稚園・保育園（19園492名）小学校（33校1,938名）中学校（8校885名）特別支援学校（1校62名）であった。また、歯と口の健康週間行事では、高知市・高知市歯科医師会主催の「歯っぴいスマイルフェア2019」に3年生は「手形コーナー」2年生は「ステージイベント」として各班で作成した媒体を用いて歯みがき習慣の啓発事業を展開した。
- ② 医療人としての倫理観や人間性そして専門的知識の指導の充実については、1年次には授業を通して職域の異なった先輩歯科衛生士の話聴講し、2年次では継承式の目的を踏まえて実習に臨み、3年次には臨床・臨地実習を通して幅広い知識を吸収することに繋がった。
- ③ 歯科臨床実習においては、事前に高知県歯科医師会と意見交換会を開催し、実習の基本方針等の連携を強化した。
- ④ 全学科の取り組みである「健康教育演習Ⅰ」では、本学附属幼稚園において歯みがき指導、「健康教育演習Ⅱ」および「イキイキ健康フェア」では高齢者を対象に口腔体操などを通して他学科と連携し、口腔衛生の必要性、口腔機能の向上を共有した。また、実践を行うことにより各年齢にあったコミュニケーションスキルをアップすることに繋がった。また、企業の健康まつりに参加し、口腔衛生の普及向上を図った。
- ⑤ キャリア形成教育の一環として実施した「就職フェア」では、38歯科医院84名の参加のもと実施され、「求める歯科衛生士像」「歯科医院の診療方針」などについて面談を行い、学生の意識の高揚となった。
- ⑥ 本年度において学生の参加はなかったが教員が参加したアイデアソンの企画が進んでいるところである。

2) 研究実績

- ① 第3回高知学園短期大学FD・SD活動研究発表会、その他学会発表、講演等歯科衛生専攻教員の専門とする内容を発表した。
- ② 外部資金取得に向けては、「科学研究費助成事業セミナー」を受講し、次年度に向け

での意欲の向上に努めた。

- ③ 北京大学口腔医学院との交流は令和元年においてはなかったが次年度は実施する予定である。

(4) 看護学科

1) 教育実績

- ① 新しい教育課程実施の初年度にあることをふまえ、旧教育課程からの移行がスムーズに進み最大限の学習成果が得られるよう、各教員が教育効果の向上を目指した取り組みを行う。

新しい教育課程の中で、1年次に配置されている「ファーストステップ演習」については、新設科目でかつ看護学科教員が多数関わる科目であることから、共通認識のもと役割分担を行い学生への指導に関われるように事前の打ち合わせを十分に行い取り組んだ。教育効果の評価の一環として、学生が学びのまとめとして取り組んだポスター発表の内容を分析した結果、科目の目的に向かって一定の教育効果を得られたと評価した。

- ② 臨地実習における学生個々の体験が効果的な学びにつながるよう、昨年度に引き続き、臨地実習における各領域間の連携の見直しをさらに進め、実習内容及び評価方法の検討を行う。

今年度は、特に「個人情報保護」を強化した実習記録の内容の見直しを実施しながらその効果と課題について検討した。また、定期的に実習報告を行い、効果的な学びが得られているか、それぞれの課題は何か、などを教員間で共通理解し、次の領域実習に活かすことができた。

- ③ 臨地実習施設の継続的な確保のために、実習における具体的な学習成果を提示しながら、実習施設連絡調整会議及び各施設における実習指導者連絡会の効果的な運営を行い、相互理解に基づいた実習施設との信頼関係の強化を図る。

実習施設連絡調整会議は、令和元年11月27日に本学にて実習施設9施設12名、看護学科教員15名の参加のもと実施した。本学からは、学生の特徴と、それを踏まえた取り組みについて報告し、実習施設においては、患者への看護の展開だけではなく、学生の看護職者としての姿勢までも指導していただけていることの感謝を伝えた。また、実習施設からも、学生指導に対する熱意あるご意見をいただき、今後の実習に向けて良い意見交換ができ、信頼関係の強化につながった。

- ④ 「戴灯式」や「ようこそ先輩」「生涯学習」などの事業と授業を連動させ、看護専門職としてのキャリア形成支援の充実を図る。

戴灯式（令和元年6月1日実施）という儀式を通じて、学生が将来の看護職者としての自分を意識し、自己の責任や主体性、協調性を磨く場となるよう教員が意図的にかかわった。特に、全員が倫理綱領をすべて覚えて朗読できたことは、学生の実習に向けた自信につながったと思われる。

生涯学習（令和元年11月16日実施）では「養護教諭と看護職者でがん教育を語ろう」をテーマとし、卒業生他11名・在学生6名が参加し、学校におけるがん教育の現状と課題について具体的なディスカッションができた。

ようこそ先輩は、令和2年3月に、養護教諭1名、保健師1名、看護師1名の先輩

を講師に迎えて実施する予定で企画を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

- ⑤ ボランティア活動等、課外活動の積極的な推進を通じて、ポートフォリオを活用しながらキャリア形成基礎力の向上・充実に努める。

学生が人や社会のために貢献できる人材となることを目指し、積極的にボランティアを勧めた結果、のべ 52 名の学生が参加した。活動内容については、学生個々にポートフォリオに記載するよう伝え、自身の努力が社会貢献の一つとして評価できるものであることを伝えた。

- ⑥ 看護専門職としての将来像を思い描き、学生一人ひとりが目指す進路を実現できるよう、各学年で段階を追いながら進学及び就職支援の充実を図る。

教員は、進路支援担当者会において、看護学科と専攻科の学生の就職状況について情報共有を行い、今後の指導の方法について検討した。また、履歴書の確認、小論文・面接指導を行い、学生が就職試験に向けて準備を整えられるよう支援した。さらに、進路について悩みを抱えている学生については、適宜、相談にのり、心配事や不安の解消に努めた。

2) 研究実績

- ① 各教員が、特に自身の専門領域を意識した学会発表や論文発表を計画的に行う。

看護学科教員の研究実績は、論文 1 編、学会発表 3 編であった。3 名の教員が、それぞれの専門領域において成果を発表することができた。

- ② 学科全体で共同研究体制を整え、科学研究費等の外部資金の獲得をめざすなど積極的に研究活動に取り組む。

今年度の新設科目である「ファーストステップ演習」は、看護学科教員が多数関わったことから、グループを作って、その内容や成果について、FD・SD 活動報告 1 編、高知学園短期大学紀要 1 編にまとめた。また、次年度の看護協会看護研究学会にて発表する準備を進めた。

(5) 専攻科応用生命科学専攻

1) 教育実績

- ① 令和元年度入学者 12 名全員が専攻科を修了し、大学改革支援・学位授与機構から学士（保健衛生学）の学位を取得した。

- ② 「バイオ上級技術者認定試験」を 2 名が受験し、2 名が合格した。

- ③ 学外活動であるハッピーマイルフェア（12 名）に参加し、骨密度測定や地域方々との交流を通して、臨床検査技師としての実践力を養った。また、本学主催のいきいき健康フェア（3 名）に参加し、地域高齢者の健康づくりに貢献した。

日本対がん協会主催のがん撲滅チャリティイベントであるリレー・フォー・ライフ in 高知（8 名）に参加し、がんやその患者に対する理解を深めた。

全国「検査と健康展」2019 高知（3 名）が参加し、臨床検査技師としての専門性を活かして定期健康診断の重要性を訴え、高知県の健康長寿県構想に貢献した。

- ④ 第 38 回高知県医学検査学会(高知市)で 2 名の修了生が修了研究の成果を発表した。また、2019 年度日本臨床衛生検査技師会 中四国支部医学検査学会（第 52 回）（松

江市)の学生フォーラムにおいて専攻科生1名がプレゼンテーションを行った。

令和元年度高知県臨床検査技師会総会において、平成30年度修了生1名が修了研究論文を学術研究誌「こうち」に投稿し学術奨励賞を受賞した。

2) 研究実績

(本科を含む。)

(6) 専攻科地域看護学専攻

1) 教育実績

- ① 平成31年度は、学生の主体的な学びを促すため、グループワークやロールプレイ、ケースメソッドなどを取り入れた授業を実施した。ロールプレイでは、学生が実際に対象者又は支援者の役割を体験することで、コミュニケーションのあり方や態度を学ぶことができた。今後は、さらに保健師の支援の特徴である継続支援のあり方を学べるよう内容を検討していく必要がある。評価体制としては、いくつかの科目でルーブリックを活用して、学生と教員が共通の項目で到達目標に対する達成度を評価している。また、リフレクションシートを用いて、単元ごとに目標の達成度と課題を整理し、不足分は次の単元で補うことで、到達目標の達成につなげている。さらに1年間の節目の時期にポートフォリオを活用し、学生自身が獲得すべき学習成果についてどこまで到達しているかを確認する機会を持った。学習成果の獲得に向けて定期的に確認する作業を通して、学生の自覚を促し、より主体的な学びにつなげられるよう取り組んだ。今後は、学生の学習成果の達成状況やその経時的な変化を分析し、教育活動に生かしていくことが課題である。
- ② 一般社団法人全国保健師教育機関協議会の定時社員総会と春季研修会や、中四国ブロック会に参加し、保健師教育や看護基礎教育検討会の動向、厚生労働省と文部科学省の考え方や今後の方向性に関する情報を得て、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案と現行の科目を照合し、内容の過不足を確認した。現在開講している科目については、科目間のつながりや到達目標、授業内容を検討し、各科目が3つのポリシーに基づいて展開されていることが学生にも分かるように、各科目のシラバスに学習成果とのつながりを明記した。今後も指定規則の改正や、教育課程の見直しの動向を確認するとともに、現行の授業内容を検討、改善し続け、令和4年度入学生からの新カリキュラムに対応する準備を整えていく。
- ③ 公衆衛生看護学の対象となる人々の生活や地域について、体験の中から学び、理解することができるよう平成31年度も公衆衛生看護学概論の科目において、フィールドワークを実施した。このフィールドワークは取り組み開始から4年目を迎えている。土佐町で3年間実施したのち、一定の効果が確認できたため、平成31年度はフィールドを変更し、中山間地域であり、さらに高齢化率の高い仁淀川町の協力を得て実施した。地区踏査や地域で活動している住民組織の活動を聞くことで、自身の日常生活ともつなぎ合わせながら、地区特性や地域の活動を学ぶことができた。事後の学習では、まとめのグループワークの時間を設定し、全体発表の前に体験してきたことをグループ内で共有し、そこから何が考えられるのかを整理する時間を確保した。今後も事前学習、現地での体験、事後学習が一貫して人々の健康と生活を支援する保健師の視点で思考できる

よう、グループでの話し合いに対するファシリテーション能力を教員自身が高め、グループワークを充実させていく必要がある。

- ④ 公衆衛生看護学実習では、実習評価の項目のひとつとしてルーブリックを取り入れ、学生と指導保健師が共通の内容で評価を行っている。平成 31 年度は、平成 30 年度に実習指導の保健師との話し合いの中で確認した内容を基にして、実習目標の見直しを行った。実習目標は学生が到達度を確認しやすい表現とし、現状の実習内容を考慮して、実習期間内で達成可能な内容で目指すべき到達点を精査した。それに伴い、ルーブリック表も修正を行った。平成 31 年度は、実習指導保健師に新たな評価表で実習評価をしたが、特に混乱することなく、記載のしづらさや、改善等の要望はなかった。今後も、国で行われている看護基礎教育検討会の検討結果を踏まえて、実習の到達目標のレベルや最低限の必須項目、評価項目の内容と数等、引き続き、担当教員間で検討しながら、見直しを進めていく必要がある。また、近年、市町村保健師の活動が多岐にわたり、個別支援では困難事例への対応が多くなってきているため、実習機関によって学生が主体的に実施できる項目や、指導保健師に同行して体験できる内容に違いがある。そこで、学生が体験したことを持ち帰り、学内で報告し合い、共有することで体験できなかったことをクラスメイトから学んで、到達目標を達成していくことができるよう配慮し、学びの質を担保していく必要がある。今後の課題として、災害発生時の対応や感染症予防への学校としての取り組み等、健康危機の発生時に実習をどのように実施するかを検討し、学生とリスクへの対応の共通認識を持てる体制を整えることが必要である。
- ⑤ 平成 31 年度は、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による特例適用専攻科及び認定専攻科として、審査方法が異なる専攻科が並行して進行する状況であったが、2 年目の取り組みであり、大きな混乱もなく取り組むことができた。また、研究指導体制として、領域ごとに教員が 3 つのグループに分かれ、定期的に話し合いを持ち、全体での検討が必要な場合には学科・専攻科会議に提案し、全体で共通認識をもち、検討して進めていく体制を整えた。また、特例適用専攻科として 3 年が経過したことを受け、今までの体制の中での課題や改善点等について、修了研究に関わる教員が集まり意見交換を行った。その結果を持ち寄って、指導教員によるワーキンググループで検討し、担当学生の決め方やテーマの選定の仕方等について改善を行った。学生に対しては修了研究の取り組みの前後でリフレクションシートを活用し、1 年間で達成すべき自身の目標を年度当初に明確にしたうえで、最終的に自己評価する形を整えた。さらに、入学前から修了研究に対する準備性を高めるために、文献検索の方法と図書館の活用についてオリエンテーションするとともに、課題を提示し、1 年間という短い期間での論文作成がスムーズに進むよう工夫した。今後も引き続き、研究指導における課題を検討しながら学生の学習成果の獲得に向けて取り組む必要がある。また、認定専攻科の学生への年間を通じての支援体制を確認し、必要な手続きが抜からないように事務担当と常に連携して取り組んでいく。
- ⑥ 学生の就職、進路支援を効果的に行うために、平成 30 年度から進路支援担当者会を開催し、学生の就職、進路支援を効果的に行える体制を整えている。平成 31 年度は進路支援担当者会を 4 回開催し、学生の進路志望状況や県内外の求人の状況について情報を共有した。また、専攻科入学前に進路希望調査や希望職種別のガイダンスを行い、

就職活動が早期から円滑に始められるように支援した。学生個別の就職活動では、応募書類の作成の指導や小論文対策、面接練習などを行い支援した。今後も学生が希望する進路に納得して進めるようにするために、看護学科との連携・支援体制を充実していく

2) 研究実績

平成 31 年度の専攻科地域看護学専攻の研究実績は、学会発表 4 編であった。

※令和元年度国家試験受験状況（参考）

学 科		試験名称	受験者数	合格者数	合格率	全国合格率
医療衛	医療検査専攻	臨床検査技師国家試験	34	21	61.8%	71.5%
生学科	歯科衛生専攻	歯科衛生士国家試験	28	24	85.7%	94.3%
看護学科		看護師国家試験	68	64	94.1%	89.2%
専攻科地域看護学専攻		保健師国家試験	19	19	100%	91.5%